

研究創案ノート

シャキーブ・アルスラーン研究への視座

——戦間期のアラブ世界とイスラーム思想をめぐって——

アダル・ラジャ*

**Methodological Approach to the Study of Shakib Arslan:
Islamic Thought and the Arab World in the Interwar Period**

Raja A. ADAL*

This research note explores an innovative methodological approach to the study of Shakib Arslan. Often perceived as a redoubtable anti-colonial activist, Arslan also earned a place in the pantheon of Arab nationalism, and has recently been rediscovered as the central figure of interwar Europe's transnational Islamic movements. This research seeks to integrate these multiple fractionalized images of Arslan within an integrative approach. It begins by placing Arslan within the context of a unified Islamic consciousness unconcerned with national, regional and cultural frontiers. Although this vision of a united Islamic umma permeated Arslan's self-consciousness, the relationship between Arslan's Islamic revivalist thought and his Arab nationalist thought has all too often been understood within the context of the nationalist paradigm. Rather than understanding religion as one element of the nationalist consciousness, this research proposes a three-vectored approach uniting Arab nationalism, the Islamic Revival, and Westernization-modernization within a dynamically integrated system of mutually interactive vectors. This tripartite system both analyzes Arslan's thought along these three axes, and makes each strand of thought dependent on the two others. Depending on time, place, and a multiplicity of factors in Arslan's existence, each intellectual current evolves in dynamic relation with the other intellectual currents, resulting in a unique symbiosis integrating elements of Arab nationalism, Westernization-modernization, and the Islamic revival within a single world view.

1. アルスラーン研究の課題と問題の所在

シャキーブ・アルスラーンは、戦間期中東世界でもっとも多作な執筆家と言われる。彼の多面的な思想はアラブ民族主義、イスラーム復興主義、アラブ文学、反植民地主義として捉え

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

られている。同時に、アルスラーンの活動はマグリブ（北アフリカ）、東西ヨーロッパ、アラブ湾岸、さらにはソ連とアメリカにまで達している。このため、さまざまな地域の独立運動、アラブ民族主義運動、イスラーム復興運動に関する研究においてアルスラーンは登場し、そこに断片的なアルスラーン像が生まれてきたのである。

本稿では、アルスラーン思想の多様な側面、および彼の広範囲に及ぶ活動を総合的に理解するための前提や視座についての検討を行いたい。これまでの研究は、アルスラーンを反西洋の文脈にのみ位置付けてきたため、イスラーム世界の固有な枠組みを十分反映したものとはなっていない。この結果、アルスラーンは「イスラーム的ナショナリズム」を唱えた思想・運動家として評価されている [Cleveland 1985]。しかし、これはイスラーム世界をナショナリズム論によって解釈しようとしているにすぎない。イスラーム世界固有の概念に基づきながら、イスラームとナショナリズムの関係の把握を目指すことで、アルスラーン研究は地域研究の発展にも貢献することができると考える。

2. シャキーブ・アルスラーンの生涯と思想

シャキーブ・アルスラーンは1869年、現在のレバノンに生まれた。レバノン山脈に暮らすドルーズ派の出身である。その生涯は、オスマン朝末期から解体に伴う過渡期、さらにその後の植民地期にわたっている。若き日のアルスラーンは、ベイルートとカイロの先進的な文学・思想環境に親しみ、文学的な才能を発揮した。17歳の時に早くも詩集を出版し、それ以降も優れたアラビア語の詩と散文の執筆を続けた。アラブ世界で「雄弁の貴公子（アミール・アル＝バヤーン）」として知られる所以である。

16歳の時、アルスラーンはムハンマド・アブドゥフの指導を受けた。アルスラーン家はドルーズ派の指導者の家柄であり、やがて彼はオスマン帝国の政界に進出し、「青年トルコ人」運動と接近した。1914年にはオスマン朝国会議員に選ばれている。その終焉まで多民族国家としてのオスマン朝を支持し、民族主義的潮流と西洋の侵攻に対して反対しつづけた。

オスマン朝末期、アルスラーンは「青年トルコ人」指導者たちと共にベルリンへ追放された。この時期の彼はオスマン朝の再興をめざしており、英仏の支配とやがて新生トルコ共和国を形成する国民大会議に反対して、ソ連の支援を求めるなどした。しかし、次第にオスマン朝再興の望みは失われていった。ダマスカスに成立した独立アラブ王国も、フランスの介入によって崩壊し、アラブ独立も夢に終わる。その後のアルスラーンはラシード・リダーの支持を得て、1921年にジュネーブのシリア・パレスチナ会議の事務総長に選出される。ここにいたって、彼は反植民地主義、アラブ民族主義、そしてイスラーム復興を推進する道を選んだのである。

1946年に没するまでの25年間、アルスラーンはスイスに在住した。この間、1930年から38

年まで『ラ・ナシオン・アラブ (*La Nation Arabe*)』誌を発行した [Arslan *et al.* 1988] (同誌の索引は、アダル [Adal 2001b] を参照)。1935年にはヨーロッパ・ムスリム会議を開催し、ヨーロッパ諸国との外交交渉に関与した。さらに反植民地主義者、社会主義者とも連携した。アラブ世界との関係では、サウジアラビアのイブン・サウド (「建国の父」)、イエメンのイマーム・ヤヒヤー国王、イラクのファイサル国王らと親交を結び、顧問として助言を行った。また一方では、ヨーロッパに滞在するシリアやマグリブの反植民地主義者、エジプトのイスラーム復興運動家、欧米のムスリム指導者とも関係を持った。

多作な著述家であったアルスラーンは、およそ20冊の著書と、2,000本以上の論考、エッセイ、時事評論などを執筆した。代表作『なぜムスリムたちは後進的となり、他の諸民族は進歩したか』 [Arslan 1965] では西洋と日本の近代化を比較し、イスラーム近代化論を素描した。

現代的なアルスラーン研究は、イスラーム、アラブ、ヨーロッパの3つの世界を結びつけ、広域的な視点からこの時期の思想を考察するという重要性を持っている。戦間期は、第二次世界大戦後に活発化したアラブ民族主義の出発点であり、また同時に、20世紀前半のイスラーム復興と70年代以降の復興を結びつける移行期でもあった。19世紀末からのアフガーニー、アブドゥフ、リダーによるイスラーム復興運動は、イスラームをいわば近代宗教へと改革しようとする試みであるが、アルスラーンのイスラーム的近代化論もまたこの文脈上に位置付けることができよう。厳密な意味でのアラブ民族主義者ではなかったとしても、アルスラーンがアラブ民族意識の高揚に果たした貢献は明らかである。双方の面からアルスラーンの思想を理解することは、戦間期のアラブ思想を理解するとともに、その後の思想潮流を把握するうえでも大きな価値を持つと思われる。

3. 先行研究の問題点

アラブ世界ではアルスラーンが他界した直後から現在にいたるまで、彼に関する多くの伝記的作品が著されている [Dahān 1960; Sharabāṣī 1978; Shayā 1982]。しかし、これらは厳密な意味での学術研究ではない。アルスラーンに言及する優れた研究も存在するが、それらはいずれもアルスラーン自体を対象としたものではない [Merad 1967; Halstead 1967; Khoury 1987]。

本格的なアルスラーン研究として本稿で取り上げるのが『イスラーム対西洋—シャキーブ・アルスラーンとイスラーム・ナショナリズムの提唱』である [Cleveland 1985]。顕在化したイスラーム復興の研究として、クリーブランドはアルスラーンを第1にイスラーム主義者として評価するが、その研究は2つの方法論的な問題点を含んでいる。

1つ目は、西洋中心的なアプローチ、つまりオリエンタリズムの問題である。『イスラーム対西洋』という題目の下で、クリーブランドはアルスラーンの反植民地運動を反西洋として理解

している。しかし、アルスラーンにとっては、イスラーム復興、アラブ民族主義、反植民地主義が主たる関心対象であった。それと同時に、アルスラーンはヨーロッパと深い関係を持っており、彼はしばしば西洋人に対して尊敬の念を表していた。英仏の植民地政策に反対した西欧の社会主義者、東欧のムスリム、アラブ独立を支持した研究者や政治家にとって、流暢なフランス語を話し、ヨーロッパの歴史・政治に精通しているアルスラーンは重要な友人であった。したがって、クリーブランドのように反植民地主義と反西洋を同一視するのは問題の単純化である。

次に、クリーブランドはアルスラーンの生涯と思想を歴史的に再構築してはいるが、思想分析の方法に枠組みと一貫性を欠いている。クリーブランドの「イスラーム的なナショナリズム」というテーゼは、アルスラーンの共同体意識をイスラームの共同体に帰着させる。しかし、それはイスラーム世界の固有概念の理解を目指しているのではなく、西洋中心のナショナリズム論からの把握である。同様に、アルスラーンの近代化論についても、ナショナリズムの観点からだけとらえている。その後の著作 [Havemann 1987-88; Kramer 1996] が、いずれもクリーブランドの著作に依拠していることから、クリーブランドの問題点を検討することは重要である。日本の場合、山内昌之のエンヴェル・パシャ研究において、アルスラーンに多くの言及がなされている [山内 1999]。アルスラーンに関する新事実を提供するものではないが、彼の汎イスラーム的活動を広くイスラーム世界の文脈に位置付けている点が高く評価される。

4. アルスラーン研究への視座

4.1 アルスラーン研究のための概念的前提

(1) イスラーム世界の一体性

オスマン朝終焉後、英仏の植民地主義者によって中東は領域国家へと分割された。これに反対する立場から、シリア・レバノンの独立運動が盛んに行われた際に、アルスラーンはその代表者のひとりであった。当時、アラブ統一を求めるアラブ民族主義が影響力を増大させていく中、アルスラーンはその先駆的な思想・運動家としての役割を果たしていた。

アルスラーンの思想と活動は、オスマン朝・領域国家・アラブ民族主義にまたがっているが、彼の意識自体は「ウンマ（イスラーム共同体）」という視点から統一的に理解できる。アルスラーンはその著作において、「ムスリム」の近代化を主張し [Arslan 1965]、またイスラームの現状について詳しく述べている [Arslan 1971]。彼の雑誌『ラ・ナシオン・アラブ』誌はその題名に「アラブ」ということばを使っているが、その内容は広くイスラーム世界の諸問題に関するものである [Arslan et al. 1988]。非アラブ世界のムスリムについて大きな関心を持ち続けたアルスラーンは、ジュネーブで「欧州ムスリム会議」を開催し、さらには東欧ムスリム

に対する知識と関心の普及のためにも働いた。オスマン朝、非アラブ世界、アラブ世界を、アルスラーンはイスラーム世界意識の枠内でとらえていたといえよう。このイスラーム世界意識の視座を解明することは、アルスラーン研究にとって重要である。

全ムスリムが持つ共同体意識は、世界中のムスリムをウンマ共同体に結びつける。地域を超えた共同体意識である点で、これはメタ地域概念であり、国家を超えた意識である点で、トランスナショナル意識である。また民族の差を超えた意識である点で、普遍的な意識といえる。その意味で、アルスラーンの活動範囲は全イスラーム世界であり、彼の思想の対象はウンマ全体であった。第一次世界大戦の敗戦後、アルスラーンはオスマン朝の指導者であったエンヴェル・パシャらとともにベルリンに追放されている。エンヴェル・パシャは、その後中央アジアにおいてソ連軍との戦いで戦死するが、このことはイスラーム的な共同体意識を前提として、初めて理解可能となる [山内 1999]。第一次世界大戦の前後では一見矛盾するアルスラーンの活動や多様な思想運動も、イスラーム世界の共通意識から考えれば、相互に矛盾しない世界観として理解できるだろう。

エンヴェル・パシャは1922年に他界したが、アルスラーンは戦間期を通じて、ムスリムの共同体意識を共有しただけでなく、イスラーム世界のさまざまな地域で、その共同体意識の強化に貢献した。これまでの研究の多くは、アルスラーンが成功を収めた運動に注目し、その分析から彼の影響を把握しようとした。このような結果主義的なアプローチは、アルスラーンが当時の世界に与えた具体的な影響のみを重視する。しかし、アルスラーンがイスラーム世界のさまざまな地域の人々の世界観に影響を与えたことは、彼のネットワークの分析からも明らかである [Adal 2001a]。

(2) ナショナリズムと宗教の関係

イスラーム世界の一体性を主張する意識とアラブ民族主義との関係を論じる前に、ナショナリズム論の視点からとらえた宗教、つまり宗教的なナショナリズム論というアプローチの持つ問題点についても考察したい。イスラーム世界においては、ナショナリズムと宗教の関係は、西洋の場合とは異なっている。この点を理解しないと、アルスラーンについての的確な把握も困難である。クリーブランドの『イスラーム対西洋』では、宗教に対するナショナリズムからのアプローチが用いられており、そこに方法論的な問題が存在している。これはクリーブランドのみならず、ナショナリズム論から宗教へのアプローチによく見られる方法論の問題である。

かつてのナショナリズム研究では、世俗主義を前提とするか、世俗主義的な実態が強調されることが多かった。最近では、宗教復興を背景として、世俗主義前提に対するアンチテーゼとして「宗教的なナショナリズム」という概念が提案されている。

ファン・デル・フェールは20世紀後半の宗教復興に適応するナショナリズム論を構築しようとする。彼が基礎にするアンダーソンのナショナリズム論では、近代的なネイションは有限

性 (limited) と主権性 (sovereignty) を持つとする [Anderson 1991]. ファン・デル・フェールの宗教的ナショナリズム論では、ネイションの領域性 (territoriality) と宗教の普遍性 (transnationality), 国語と聖なる言語, そして移民の通過と巡礼の通過など, 宗教の「言説」とナショナリズムの「言説」が矛盾せず融合しようとする [Van der Veer 1994]. 政治的ネイションの確立のために, ナショナリズムはあらゆる手段を用いるものであり, 宗教もそのひとつたりうるといふ論旨だが, しかしこれではナショナリズム論の枠組みに宗教を挿入するにすぎないであろう。

現代社会の中で実体を持っている諸宗教は, それ自体の世界観, 政治的・文化的な要求や目的を持っているのであり, それら諸宗教の目標を, 近代的なナショナリズムの枠組みにおいて目標とされるものと同一視することには, 大きな問題がある。アルスラーンも, そのような意味においてナショナリズムを希求したわけではなく, 彼の思想をイスラーム的要素の強いナショナリズム, ないしはイスラーム的な文化を背景としたナショナリズムとして片付けるわけにはいかない。イスラームにおいては, ナショナリズムと宗教, あるいはより広く政治と宗教, 聖と俗の関係が西洋とは異なっている。モデルとして西洋的なナショナリズムを前提とし, その修正として宗教的要素を強調するだけでは不十分である。

4.2 アルスラーン研究の新たな視座

アルスラーンの思想を総合的にとらえるには, ナショナリズム論の変形としての宗教的ナショナリズム論ではなく, 地域の固有な概念の理解が必要とされる。上述した「イスラーム世界の一体性」という概念はそのひとつであるが, 彼の思想にはイスラーム以外の構成要素も存在しているため, その分析には新たな視座が必要とされる。

アルスラーンの思想は非常に多様であり, イスラーム思想, アラブ民族主義, 西洋の影響 [Arslán 1933], 近代化論 [Arslán 1965] を含んでいる。先行研究はその多様性を的確に捉えることに失敗しており, 思想的な混乱や未分化な状態をアルスラーンに見ている。あるいは, アルスラーンの思想の一面のみを強調し, 彼を単なるアラブ民族主義者, もしくはイスラーム復興主義者とみなしている。このような類型化や, アラブ民族主義思想とイスラーム主義思想の二元論的な立場から脱却し, 総合的なアルスラーン像を得るためには, 「ベクトル分析」が有効であると考えられる。

この概念を, 小杉はオスマン朝以降の中東世界の解析概念として提出している。具体的には, 民族主義, イスラーム復興, ならびに西洋化・近代化という3つの「ベクトル」を用いている [小杉 1994]. ベクトルは「方向性を持った力」を指す数学の概念であるが, 「極端な場合, 拮抗するベクトルが相殺し合って, 運動体が停止して見えることすらありうるであろう。その場合でも, ベクトルの抽出に成功するならば, 一見停止として見える2つの運動体があるとしても, 両者の間の違いが拮定できるはずである」とする [小杉 1994: 11]. このように考

えると、思想家や運動を単純に類型化することなく分析が可能となる。ベクトルの方向性とその力の大きさ（図形的には長さとして示される）、すなわちその思想の影響力が、いかに相互に影響を与えあっているかを見ることができる。

アルスラーンの思想に、これら3つのベクトルが存在するのは明らかである。アルスラーンの場合、3つのベクトルがそれぞれ強い力を持っていた。そのため、時代・地域・研究者によって注目するベクトルが異なってきたのである。そして、それによってアルスラーンの位置付けも大きく異なるものとなってきた。しかし、アルスラーンの思想をもっとも強いと思われるベクトルのみに還元するのは誤りである。

アルスラーンの置かれた時代、そして地域的な文脈によって、3つのベクトルの相互関係は変容する。オスマン朝時代のアルスラーンは、アラブ民族主義を重視してはいなかった。しかし、オスマン朝終焉後には、アラブ民族主義が主要なベクトルの1つとなった。そのアラブ民族主義にしても、イスラーム復興と西洋化・近代化思想と関連付けたくらうで、時代と地域による変容を動的に把握する必要がある。このような「ベクトル分析」によってこそ、アルスラーンの思想と活動にも、それにふさわしい総合的な位置が与えられることになるだろう。

5. 結 語

本稿では、「ベクトル分析」によってアルスラーンの思想を解明していくことの重要性を論じ、その分析に際して、前提となるいくつかの問題を論じた。オスマン朝終焉後の中東は国民国家に分断されていたが、アルスラーンは国民国家や地域の概念以上に、統一したイスラーム世界の共同体意識を強調した。ムスリムの共同体意識、すなわちウンマ意識を持っていたアルスラーンにアプローチするには、「イスラーム世界の一体性」という観点が重要となる。20世紀の前半にムスリムのトランスナショナルなネットワークは近代国民国家によって分断され、衰退したと考えられているが、アルスラーンの思想と活動は希薄化した共同体意識の復興に貢献したのである。

アルスラーンの思想を理解するためには、それをイスラーム世界が持つ固有の概念に位置付ける必要がある。アルスラーン思想における最大の問題は、イスラーム思想と民族主義思想の連関である。アルスラーン思想の研究は、イスラーム思想と民族主義思想という、20世紀の中東を代表する思想運動の解明に直接貢献するものであることを強調して、本稿の結びとしたい。

参 照 文 献

- Adal, Raja. 2001a. Constructing Transnational Islam: The East-West Network of Shakib Arslan. In Stéphane Dudoignon, Hisao Komatsu and Yasushi Kosugi, eds., *Intellectuals in Islam in the 20th Century: Situations, Discourses, Strategies*. London: Curzon, forthcoming.
- . 2001b. *Index of La Nation Arabe*. Tokyo: Islamic Area Studies Project, forthcoming.

- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities*. London: Verso.
- Arslān, Shakīb. 1933. *Tarīkh ghazawāt al-‘arab fī faransa wa-siwīsrā wa-īṭāliyā wa jazā’ir al-baḥr al-mutawassit*. Cairo: Matba‘a ‘īsa al-bāb al-ḥalabi.
- _____. 1965. *Li mādhā ta’akhhbara al-muslimūn wa li mādhā taqaddama ghayrubum*. Beirut: Dār maktaba bi al-ḥayāt.
- _____. 1971. *Hādīr al-‘ālam al-islāmī*. n.p.: Dār al-fikr.
- Arslan, Émir Chékib; Ihsan Bey el-Djabri, eds. 1988. *La Nation Arabe*. Farnham Common, England: Archive Editions.
- Cleveland, William. 1985. *Islam Against the West: Shakīb Arslan and the Campaign for Islamic Nationalism*. Austin: University of Texas.
- Dahān, Sāmī. 1960. *Al-amīr shakīb arslān: Hayātuhu wa-āthāruhu*. Cairo: Dār al-ma‘ārif.
- Halstead, John. 1967. *Rebirth of a Nation: The Origins and Rise of Moroccan Nationalism, 1912-1944*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Havemann, Axel. 1987-88. Between Ottoman loyalty and Arab 'independence': Muhammad Kurd ‘Alī, Ğirġi Zaydān, and Šakīb Arslān, *Quaderni di Studi Arabi* 5-6: 347-356.
- Khoury, Philip. 1987. *Syria and the French Mandate: The Politics of Arab Nationalism 1920-1945*. London: I.B. Tauris.
- 小杉 泰. 1994. 『現代中東とイスラーム政治』 昭和堂.
- Kramer, Martin. 1996. The Arab Nation of Shakib Arslan. In Martin Kramer, *Arab Awakening and Islamic Revival: The Politics of Ideas in the Middle East*. New Brunswick: Transaction Publishers, pp. 103-110.
- Merad, Ali. 1967. *Le réformisme musulman en Algérie de 1925 à 1940: Essai d'histoire religieuse et sociale*. Paris: Mouton & Co.
- Sharabāsi, Ahmad. 1978. *Shakīb Arslān: Dā’iya al-‘urūba wa al-islām*. Beirut: Dār al-jil.
- Shayyā, Muḥammad Shafīq. 1982. *Shakīb arslān: Muqaddimāt al-fikr al-siyāsī*. Beirut: Ma‘had al-inmā’ al-‘arabī.
- Van der Veer, Peter. 1994. *Religious Nationalism: Hindus and Muslims in India*. Berkeley: University of California Press.
- 山内昌之. 1999. 『納得しなかった男—エンヴェル・パシヤー—中東から中央アジアへ』 岩波書店.